

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24792564

研究課題名(和文) 島嶼における看護職 - 住民の協働的なパートナーシップ構築交渉過程のエスノグラフィー

研究課題名(英文) Ethnography of negotiation process of partnership between nurse and client in rural area

研究代表者

森 隆子 (Mori, Ryuko)

鹿児島大学・医学部・助教

研究者番号：50507126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：小規模島嶼においては、住民自らが主体的な役割を獲得して、積極的に保健活動に参加できることが重要である。そこで、看護職がどのようにしてそのような看護実践を意図した役割を獲得していくかを検討した。小規模島嶼における熟達者は、島嶼社会において従来精神衛生上の課題とされてきたと見られる文脈を克服し、むしろそれ以上に専門職としての役割形成ならびに役割遂行の‘手がかり’として効果的に活用しながら発展的な活動デザインを創り出していた。

研究成果の概要(英文)：In rural islands, the residents themselves to win the role proactive, can participate in health activity is important. Expert in small islands, the characteristics as 'clue' of role performance and role formation as a profession rather more had created a design activity developmental while leveraging effectively.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：小規模島嶼・へき地 協働的なパートナーシップ 看護モデルの開発

1. 研究開始当初の背景

小規模島嶼における過疎化や高齢化は全国と比しても急激な増幅をもって進行しており、特に保健医療福祉資源も乏しい特性上、抱える問題は深刻さを増している。日本社会での早急な小規模島嶼を含むへき地保健医療対策として、医師を中心とした人材確保や支援について法的な整備が昭和31年以降継続的に行われている。しかし、小規模島嶼の保健医療対策にて効果的かつ高い効果が期待できるには、保健医療供給体制の強化のみならず、そこに暮らす地域住民が主体的に健康をコントロールしていく力を獲得していき、そのために、看護職を含めた専門職への介入支援ならびに評価の枠組みの検討を併せて重視すべきである。特に一義的には様々な居住不利条件を抱えやすい小規模島嶼においては、専門職の人材確保、ハード面の整備による問題解決を図るのみならず、地域住民を積極的な主体として位置づけ、住民自身が専門職と協働的なパートナーシップを発揮しながら地域全体で健康づくりを推進できる枠組み、すなわち“自律型地域”を育成する看護実践モデルの構築が重要である。また小規模島嶼のような共同体社会に特徴づけられる様相をもった地域においては、地域での暗黙的なルールや価値観を十分に理解した活動展開がその鍵となる。たとえば、身内/よそ者にみられる排他性、匿名性の欠如などが島嶼で看護活動を展開する上で重要な概念があり、小規模島嶼における看護実践のエキスパートは、それらの文化的特性を踏まえた看護実践を展開していると考えられる。研究代表者がこれまで、へき地診療所に勤務する看護職を対象に実施した調査研究(小規模島嶼における看護実践モデルの開発, 鹿児島大学大学院修士課程論文, 2004.)によると、へき地診療所看護職が通常の診療所業務のみならず、無償で家庭訪問

を行ったり、自分自身がモデルとなり地域全体への波及効果を狙った健康増進活動を率先して展開するなど自律性の高い看護活動を展開している実態がみられた。地域特性等の環境要因をコントロールして活動状況を分析した場合に、「身内」「よそ者」にみられる地域社会の特性が看護職との関係性にも持ち込まれており、それらが看護活動の範囲や中身を決定する際の要因となることが分かった。特に人との関係性が重視される島嶼社会において、看護職-地域住民間の関係性がどのように決定されるかは、役割期待ならびに役割行動に影響することが示唆された。ところが、従来精神保健上の問題とされてきた小規模島嶼における専門職と地域住民の関係の密接性による事象を、効果的な看護展開上の戦略のための枠組みとして捉える調査研究はほぼ皆無である。

本研究の長期的な展望として、小規模島嶼看護職を一つの学習共同体として、あるいは小規模島嶼地域を一つの学習共同体として組織化できる方策をモデル化できることにある。このことは自律型地域の実現に向けた効果的かつ持続的、発展的な素地となると同時に、実践を内省する学習共同体として組織化できる過程そのものに、看護職にとって自身の確固たるアイデンティティ形成の過程を含むものになると考えている。すなわち、長期的な観点から見た場合に人材確保策となるのみならず、小規模島嶼に働く看護職の持続発展的な成長の土壌づくりを目指すものである。

2. 研究の目的

本研究では特に、下記をリサーチクエスションに置いて、検討を行う。

(1) 小規模島嶼で働く看護職が、「島嶼社会の特性をどのように捉え、看護へどのように

関連付けているか(もしくは関連付けていないか)。島嶼社会の特性を看護実践に関連付けている場合、どのような形で実践へと展開させていくか(もしくは関連付けていない場合、それはなぜか。そのことは、看護実践にどのような影響をもたらすか)」

(2) 小規模島嶼で働く“すぐれた看護職”の特性(思考・行動)は何か。実践者(熟達者)に共通する要素はあるか。

(3) 小規模島嶼において、上記の“すぐれた実践”の展開が困難な場合、その要因は何か。

を事例検討の手掛かりとして、小規模島嶼におけるすぐれた看護実践とその関連要素について、小規模島嶼におけるすぐれた看護職の特性とその関連要素について、その抽出を試みる。

なお、本研究では特に、「小規模島嶼において地域住民や関連組織が主体的にヘルスプロモーションを推進していける役割を獲得できるように効果的に働きかけていく活動のことを“すぐれた実践”とし、その実践者を“すぐれた看護職”とする。

3. 研究の方法

今回は特に、看護職へのヒアリングを中心に調査を行った(半構造化面接)。調査期間は2012年9月から2013年9月であった。

【対象】

研究対象者の概要については、下記の表の通りである。

インタビューは1回60~90分程度行った。

場所	対象	調査期間
A 県 A 島	保健師 2 名 同課課長 1 名 (事務職)	2012 年 9 月
A 県 B 島	保健師 2 名	2012 年 9 月
B 県 A 島	助産師 1 名	2013 年 1 月
B 県 B 島	保健師 3 名	2013 年 3 月
B 県 C 島	保健師 5 名	2013 年 3 月
B 県 D 島	保健師 1 名	2013 年 4 月
C 県 A 町	保健師 4 名 住民 2 名	2013 年 9 月

【倫理的配慮】

本研究の実施にあたり、鹿児島大学医学部の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。研究参加者には調査の趣旨と倫理的配慮について説明し、同意を得た。

4. 研究成果

小規模島嶼の看護実践において「身内/よそ者、古株と新入りに特徴づけられる排他性」「匿名性の欠如」「専門職や地域の資源が乏しいことによる孤立」(以上、Rural Nursing 理論に基づく)は、重要な概念となった。これらの概念に特徴づけられる小規模島嶼の特性については、地域の規模によってもその程度(濃淡)にバリエーションはあると考えられたが、今回の研究参加者であったほぼ全ての看護職がその特性を理解していた。では、小規模島嶼を特徴づけるこれらの概念を、看護職はどのように捉え看護実践へと関連付けていただろうか。

小規模島嶼における熟達者は、島嶼社会において従来精神衛生上の課題とされてきたと見られる文脈を克服し、むしろそれ以上に専門職としての役割形成ならびに役割遂行の‘手がかり’として効果的に活用し

ながら発展的な活動デザインを創り出していた。

たとえば、保健師 A 氏は夫婦共に非地元出身者であったが、住民と同じ地域に暮らし生活を共にし、保健師としてその地域との関わりを深める中で、やがてその地域を自分の故郷のように愛着を持ってみるようになる。最終的にはその地域に家建てて永住を決めたのである。このことは、A 氏自らが「身内」となりその地域に浸る覚悟として地域住民の眼に映ったのであろう。それまで以上に、温かな眼差しと期待をもって、A 氏を見つめることとなる。

助産師である B 氏は、地元出身者であった。自身も子育てを地域で行う中で、幼少期から学童期に至る子どもや家族の生活状況が眼に見えて情報として入ってくることを「(島外で働いているときは)外来は外来、病棟は病棟、とすべてが分かれていた。今は、業務の中で地域や暮らしが見えてくる。その子の成長が見えたり…。あるお母さんが、予防接種で来院したと思ったら、もう次には妊娠していたりして。そうするとお母さんを取り巻く健康課題も見えてくる。繋がって見えてくるのが面白い！」と、一貫して継続したケアができる喜びを語った。

また、小規模島嶼において優れた実践を遂行してきた“すぐれた看護職(熟達者)”にはある共通点がみられることが分かった。彼らは『地域に根を張り、ひたすら歩き住民の声を聞く(地域に浸る)中で、暮らしぶりや生き様を丹念に見る』住民との信頼関係を築きあげてゆく中で見出された真のニーズを基に健康課題を明確化し、自らの役割を描く』プロセスを丁寧に紡ぎながら“持続的かつ発展的に、地域住民自身が自らの力を獲得できるための地域ケアシステ

ム構築”実現に向け自らの役割モデルをデザインしていた。

さらに、彼らの実践過程は、「現場で直面する様々な事象を経験し(具体的経験)振り返り(省察的観察)そこから得られた教訓を抽象的な仮説や概念に落とし込み(抽象的な概念化)新たな状況に適用させ行動する(積極的な実験)」という経験学習における一連のプロセスを 初学者から熟達者へと至る過程において一貫して 深い体験として経ることにより自身の役割モデルを循環的に評価・構築してきた可能性が高いことが考えられ、優れた看護職はリフレクティブな思考過程を確立し、反省的实践に基づく実践を展開していることが示唆された。

一方、地域住民/患者あるいはケアチームとの関係性においては、“伴走者”あるいは“積極的なパートナー”としての関係性、すなわち<協働的なパートナーシップ>の構築を前提とした役割モデルを採用することにより、ソーシャルキャピタルの醸成も意図した実践をデザインすることに成功していた。小規模島嶼におけるすぐれた看護職は、上記に見られるような<小規模島嶼社会の特性>を把握し、その特性をうまく取り入れながら地域住民や他専門職との<協働的なパートナーシップ>を構築した活動を実践していた。熟達者の語りから<小規模島嶼社会の特性><協働的なパートナーシップ>といった概念を駆使した看護実践能力の獲得には、ある一定の熟達化の過程が存在すると考えられたが、何がその契機となるのかは、今回の調査では十分検証できなかった。小規模島嶼において、これらの特徴的な概念を踏まえた活動実践の展開に結びつけにくいと捉えている者も存在していると考えられた。そのような場合に、(現段階の分析としては)活動の幅が一部

制限されるといったような側面もみられた。
この点に関しても今後検証したい。

5．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6．研究組織

(1)研究代表者

森 隆子 (Mori Ryuko)
鹿児島大学・医学部・助教
研究者番号：50507126

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

無し